

1993年2月1日

## 鳥を扱った分類や形態に関する 研究が日本で少ない理由

桑原和之

博物館に勤め4年になる。鳥の標本を扱うことが多いが、性別や年齢の識別に役立つ文献が意外と少ない。仮に、文献が入手できたとしても信頼性が高い文献はさらに少ないので苦勞する。なぜ、文献が少ないか？現在の日本の鳥学会では、分類、形態や識別に関する研究報告がきわめて少ない。なぜか？日本でこれらの分野研究が少ない主因が3つある。

### 1. 研究者が論文を作成しない。

野外で鳥を調査する研究者は、まず研究対象としている種やグループの性別や年齢の識別をしているはずである。識別ができなければ研究は進まない。識別のために形態などは熟知しているのであるが、研究の目的が識別などではない。したがって、その情報をまとめた報告する習慣が研究者にないので、論文がでない。

### 2. 研究者が興味を持たない。

論文、報告書などの文献が少ないので、鳥の分類、形態や識別に関して興味がわかない。研究意欲もわくはずがないので研究テーマとして選択しない。必然的に論文が生産されず、情報が蓄積されない。情報に刺激され、研究しようとする新人が生まれない。

### 3. 研究指導者がいない。

分類、形態や識別に熟練した研究者が後継者を育てない。研究しようとする新人が生まれないので、研究の指導もできない。分類などを専門に研究する研究機関も少ない。標本が充実していて研究できる体制が整っている研究所は、日本にあるのであろうか？標本を収蔵している博物館などに、仮に指導できる研究者がいたとしても、博物館の職員では学生に単位を取得させることができない。つまり、学生は後継者を目指すことができない。例え目指すことができたとしても、就職することはできない。分類や形態学などの研究を指導する教員が公的機関に



右から2人目が著者

## 券頭言

いない日本では、学生や研究者が育たないのであろう。

標本を扱う際に役立つ外国の文献は多い。外国からまれに飛来する大陸の普通種である日本の珍鳥の性別や年齢の識別が意外と簡単な例が多い。しかし、日本を含め極東地域の普通種の文献は少なく、普通種の識別が意外にも難しいことが多い。日本で生活する鳥たちは、大陸の鳥とどのくらい違うのか？性差、年齢、羽色や換羽の形式は同じか？測定値には差があるのか？日本産鳥類でももう一度分類学的な研究をする必要があるのではないかと考えながら標本を整理している。その時同時に、博物館では資料を収集しその資料を生かした研究や教育を行うべきではなかろうかなどと博物館の役割について考えてしまう。

論文や報告書などで情報が手に入り易い生態学に研究者が多くなればなるほど、少数派の分野はさびれてしまう。研究者は自然発生的には生まれない。1、2、3、の悪循環をどこかできらなければならないと思う。  
(千葉県立中央博物館)

## 大会報告

### 1992年度鳥学会大阪大会報告

去る11月21日～23日まで、予定通り本年度大会が大阪市立大学において行われました。大会参加者は305名、口頭発表56題、ポスター発表27題、ビデオ発表3題、自由集会5テーマで、内容も幅が広く盛会のうちに終了させることができました。ご協力を心から感謝いたします。懇親会は196名のご参加を得て盛り上がったのですが、時間が足りなくてご不満の点もあったと思われまふ。お詫び申し上げます。なお、本大会運営についてお気づきの点やご意見がおりの方は、遠慮なく事務局までお知らせ下さい。来年度の大会事務局へ申し送りたいと思います。

(1992年度大会委員長、山岸哲)

#### 1992年度日本鳥学会大会に出席して

橘川次郎

大会委員長のお招きで、1992年度の大会に出席できたのは本当に幸せでした。感想を簡単な文で綴りお礼の言葉にしたいと思います。

第一に、日本鳥学会の近年の発展ぶりと、300人を越える参加者、特に若い人達の熱意にふれて大変頼もしく感じました。

第二に、日本鳥学会の幅の広さと学術的な水準の高さがよく表われて、最近国際的なレベルをいく行動学(ビデオも含めて)や生態学の研究から形態学、分類学、内分泌学、渡り、自然保護、環境汚染など、スライド、ポスター共に内容が非常に豊富でした。

第三に、発表に無駄がなく、短い時間に盛られた情報量は大変なものでした。発表準備がよくされていたのが、どの講演でもポスターでも明らかでした。またオーガナイザーの配慮で同時講演が隣り合った会場ですムーズに行われ、実質的に書かれた講演要旨からは背景がよみとれて、出席できなかった人達も個人的には討論ができる程でした。

第四に、学会が国際化したことです。これ

は外国で行った研究の発表だけでなく、近隣諸国との交流や共同研究に現われて、国境を越えた鳥の学問のあり方ができたようにみえました。

第五に、いわゆる「アマチュア」と「専門家」が協同で研究や発表のできる場がみえてきました。これは学問として鳥学の水準を高めていくためにも必要なことと信じています。鳥学に専念できる研究者の養成を怠ってははいませんが、同時に誰でも参加できる分野、特に鳥の種や群集の存続に役立つ研究や情報集めも重要な協同作業として推進できます。

最後に、慶熙大学の元柄昨先生の研究室から参加した札幌永氏の招待講演のあとに続いた質疑応答や、自由集会での熱心な討議にみられた鳥学への慕情です。これはあらゆる範疇を越えた研究者に共通の思いでしょう。その表現と研鑽の場が討論の時間として5分位あればと思いました。時間厳守のスライド発表を15分、質疑応答を5分にできないものでしょうか。

皆様の御研究の発展とますますの御成果をお祈り致します。(クインズランド大学)

鳥学会へ出席して

正富宏之

大会の感想の公表は、その会がどのようなものであったかを、ある程度客観的に、個人の印象を通して相手へ伝える作業といえる。しかし、今の私にそうした文を書く余裕がない。したがって、以下は私的な内容以外の何物でもないことをお許し願いたい。

雑用係だった3年間のブランクの後、戦列へ復帰(?)してきたつもりだった。が、元来ぬるま湯に浸かった様な研究しかしていなかったから、意欲はあるものの、自分の問題意識のレベルが低下しているのを、人々の講演を聞きながら意識させられた。

現在の研究の流れに触れようと、まじめに(?)講演を聞いたのが、かえって不消化を招いたのかも知れない。講演を聞くのを時々さぼって、休憩室などで人とのふれ合いを求めた方がよかったのだろうか。それに意味があることは、こうした大会の一つの効用とされている。それとも、老境に近づいて、次々と流れる若い人たちの講演にテンポが合わなくなったのか。

ともあれ、ルーチンとしての調査とは別に、自分の関心事に少しでも取り組まねばと、改めて自覚させられたのが、今大会での私の、月並みながら、収穫であった。

(専修大・北海道短大)

大会印象記

酒井秀嗣

久しぶりに大会に出席しました。かつて何回か内分泌学の分野の報告をしましたが、議論する相手もあまり無く、足が遠のいていました。研究内容が魅力に欠けたり、話が分かりやすくなかったことが原因だと思いますが、参加者の研究分野が片寄っていて問題意識が重複しなかったという印象も受けました。本来、鳥類という研究対象を共通の基盤として

成立している学会ですから、研究内容も方法も鳥類にかかわることであれば様々な報告があってしかるべきです。同じ問題に対してもいろいろな方面からのアプローチが想定されるし、いろいろな分野の研究者と積極的に提携していくことが研究の進展に非常に有効だと言えます。こうした考え方による昨年5月の合同シンポジウム(ニュース39号)やインドでの国際シンポジウム(同44号)に参加し、それらの影響を受けて本年また大会に出席した次第です。

まず参加者、演題の多さに驚かされました。発表の分野も広がり、研究をアピールする工夫も非常に良くなされていて、ポスターなどは端から足を止めてしまいました。口頭発表、ポスター、ビデオ、自由集会和、国際学会ではともかく、国内でこれだけメニューが同時に揃った大会は初めてです。主催者の努力によって発表し易い形態を選べたことが盛況を呈した一因だと思います。出席者の年齢構成も幅広く、実際にデータを出している人が報告をしているため熱っぽい議論が繰り広げられていました。専門以外の分野では特別に初歩的なことから話しを聞くこともできました。充分飲み食いした懇親会も会話が盛り上がった最中にお開きになって、消化不良の感が否めないほどに熱気に溢れていました。

しかし、朝から夜まで詰まった発表をフォローする事は大半の参加者にとっては不可能だと思います。全く専門外の分野の話題は、興味を持ててもじっくり聞かないと理解できません。ポスターも腰を落ちつけて聞いていると到底時間が足りません。大まかな分野毎に解説者を設けて、その分野での研究の特徴、問題点、興味ある報告、ポスターでの主な議論などを最後に報告してもらい、パネル方式での総合討論などで締めくくったらどうでしょうか。自分の関係した分野以外の研究をも含めて、鳥学を総合的にとらえる場になると思います。(日大・歯・生物)

---

鳥獣研究者の自由集会

森林総合研究所東北支所において、第104回日本林学会大会が開催されますが、会期中の4月7日(水)に「鳥獣研究者の自由集会」を行ないます。興味ある方は、由井正敏(森林総研・東北支所)または石田健(東大・秩父演習林)までご連絡下さい。

## 楽しみな若手の増加

浦野栄一郎

つい半年前まで在籍していた大学での大会だったので、運営面についてはあえて誉めもけなしもせずに、その他の点で印象に残ったことを述べる。

まず感じたのは若手による発表の増加である。生態学・行動学の分野で鳥の研究者が比較的多い私たちの世代の後、鳥をやる大学院生が散発的にしか現れない状況がしばらく続いていたが、今大会では各地の大学で若手の院生が頑張っているのをはっきりと感じることができた。新しい学生会費制度の導入でさらに多くの若手が鳥学会に集まって来ることを期待したい。

次に感じたのは発表技術の向上である。少なくとも私の聴いたスライド発表では、時間ぎれは一つもなく、その分(?) 質疑応答が活発だったように思う。まだまだ改善の余地はあるが、スライドの図表も極端に見づらいものはだいぶ減ってきた。コピー機があれば簡単に作れ、直前でも手直しのきくOHPはもっと活用されてよいと思う。

たまたま個人的な用事がいくつも重なったために、ポスター発表をほとんど聴けなかったのは残念だった。丸2日間掲示できるようにしたのは良かったが、発表数を考えるとポスター専用の時間がもう少し欲しい。今大会は実質2日半の大会になったが、それでもかなり過密な日程だった。最近の発表総数や自由集会の増加傾向を考えると、大都市での開催の場合、2日間での大会は限界に達したということだろう。

(京大・生態学研究センター)

## 学会発表と自由集会の意義

高木昌興

学会の大会で発表することの利点は多くあるが、その中でも自分の研究を多くの方に紹介できることと、発表内容について質疑応答ができることが最も大きな利点であろう。私自身、鳥学会大会に参加するのは、今年で3回目になったが、発表をしたのは今年がはじ

めてである。発表をしなかった大会に比べると収穫は格段に大きくなったと実感した。

まず、発表を通じて内容に興味を持ってくださった方や同じ種類の鳥を研究している方からは、積極的に話しかけてもらえた。逆に、様々な方に話しかけて自分の研究を話題にする場合にも、発表をしない場合よりも受け入れてもらいやすいようである。そして、こうした議論の中で有意義なアドバイスをもらうことができた。批判的な評価をして下さる方も何人かいたので、これを機会に違った角度から自分の研究を見直すことができ、研究意欲もさらにかき立てられた。学生は積極的に発表をすべきだと思う。

また、今回の鳥学会大会でも、シンポジウム、招待講演、5つの自由集会など比較的長めの講演が用意されていて、発表時間の短いスライド発表では求められない体系的な話を聴くことができた。

その中でも、私が最も期待していたプログラムは、自由集会“第二回ちょっと長めの話を聞く会”である。最近学位を取得された方に学位論文の内容の一部を発表していただくこの自由集会は、立教大学における'91年度の鳥学会大会から始まった。話題提供者と一般参加者の間に学問上の議論の場を提供すると同時に、研究の最終的な到達目標の設定に役立てようというのがこの会の主旨である。

実際、学位論文を読むだけではわかり難い論文のテーマ設定までの研究の流れなどを聴くことができた点で参考になった。また、丁寧な解説を付け加えられた話を聞くことができることにプラスして勉強になるのは、発表者と質問者の議論である。この自由集会に参加していた方々の中には、プロの研究者や鳥の研究で学位を取られた方が多く見受けられ、発表者に対する質問も論理的かつ核心をついたものが多かった。こうしたところからも様々な情報が得られ、また論理的な考察方法も学べた。鳥を対象に研究を行っている若手の目標となるようにこの企画は長く続けていきたい。(北大・環境科学)

次号で報告特集の第2弾を予定しています。

## 森林総合研究所所蔵の鳥類標本のデータベース化について

松岡茂・東條一史（森総研）

高野肇（多摩森林科学園）

森林総合研究所（つくば）には、1910年代からの鳥類標本（仮剥製、本剥製）約4200点が、温度制御された標本室に保存されています。現在でも鳥類学の研究にこれらの標本が利用されることがあり、所内だけでなく外部の研究者もこれら標本を活用しています。外部の研究者は利用に先立ち標本の所蔵の確認を求めてきますが、10冊以上の標本台帳をそのつど調べるのはかなりの労力を伴います。そこで、台帳のデータをパソコンソフトで検索できるようにしました。また、データベース化と同時に当所での検索の手間も省くため、標本の利用希望者に標本データベースを開放することとしました。ただし、現在データ入力が終わったばかりで、エラーチェックを行っていません。近日中には、訂正を行なう予定ですが、お急ぎの方はご利用ください。また、台帳と実際の標本との突き合わせも行なっていません（これは当面行なう予定はありません）。

データの入力・保存はdbXLで行ないました。データはdBASEⅢと互換性があります。種名、標本番号、採集地、採集年月日などが入力されています。データの検索や検索プログラムの作成は、ソフトのマニュアルを参照にして各自で行なってください（データベースソフトの利用法についての問い合わせはご遠慮ください）。また、データベースの利用は、個人利用に限定します。

希望者は、当所所蔵標本を利用する必要性を記した書面（B5用紙に、研究テーマ、研究目的など記入、書式は自由）、フロッピーディスク1枚（5インチ、3.5インチ2HDどちらでも可。PC9801上のMS-DOSで読み書きできるようフォーマットしたもの）、それに返送用の切手を貼った封筒を同封の上、〒305 稲敷郡茎崎町松の里1 森林総合研究所鳥獣生態研究室までお送りください。

オオタカシンポ

### 第3回オオタカ保護シンポジウム報告

遠藤 孝一

8月22・23の両日、栃木県黒磯市・西那須野町において「第3回オオタカ保護シンポジウム」（主催：オオタカ保護ネットワーク・野鳥の会栃木県支部、後援：日本鳥学会など）が開催されました。1日目は、約50名が参加し、オオタカの生息地の視察と密猟防止バリエーションの取り外し、営巣環境調査法の実習などが行われました。中でも、使用後の巣の見学は人気があり、営巣木にかけられたはしごに多くの人が登り、実際に巣を見たり触ったりして、巣の大きさや頑丈さ、きめ細かさなどを実感しました。

夜の懇親会、朝の早朝探鳥会を経て、翌日は会場を西那須野町立三島公民館に移しシンポジウムが開催されました（参加者約90人）。午前中のセッション1では、埼玉県鳩山町周

辺のオオタカの生息状況やゴルフ場開発に対する保護活動、東京都の秋留台開発計画と保護活動、静岡県掛川市での調査結果などが報告されました。またネットワーク事務局の遠藤より、全国オオタカモニタリング調査（案）が提案されました。

午後のセッション2では、日本イヌワシ研究会副会長・山田律雄氏の「日本におけるイヌワシの生息状況と保護問題」、ネットワーク事務局・遠藤の「日本におけるワシタカ保護の現状」、岩手大学助教授・磯崎博司氏の「希少野生動植物種保存法について」の3題の話題提供を受けて、「ワシタカ保護からみた希少野生動植物種保存法について」のパネルディスカッションが行われました。法律にうとい我々にとっては、4月から施行される新しい

## オオタカシンポ

法律について、内容や問題点を整理してわかりやすく解説した磯崎氏のお話は、とても参考になりました。特に、氏の「この法律は、日本の法律の中では比較的すばらしいものだが、それは運用次第だ。それには、ひとりひとりがこの法律に関心を持ち、所管する機関に働きかけていくことが重要である」という言葉は印象的でした。

午後4時30分、特殊鳥類およびレッドデータブックの絶滅危惧種、危急種、希少種に選

## コスタリカ

定されているワシタカ類17種(亜種)を新法における「国内希少野生動植物種」に指定することなど、3項目の要望を盛り込んだ決議文を採択して、2日間にわたるハードなシンポジウムを終了しました。

最後になりましたが、ご後援いただいた諸団体ならびに運営にあたったボランティアの皆さんに心から感謝いたします。なお決議文は、9月11日に環境庁に要望書とともに提出してきました。(オオタカ保護ネットワーク)

## コスタリカ通信(1)

コスタリカって!?

「コスタリカ」という国があることを知っている人は少ないだろう。「中米のスイス」「世界で最も美しい鳥、ケツァールの国」「自然保護先進国」「美人の国」の1つでも聞いたことがあるだろうか?この全てが本当なのである。ニカラグアとパナマの間、南北アメリカ大陸をつなぐ地狭の真ん中に位置する面積50,900km<sup>2</sup>(九州と四国をたしたより少し小さい)のこの小さな国はその地理的位置と多様な環境(2つの大洋、3820mまでそびえる山脈、幅広い降水量)に恵まれ世界一の生物多様性を有する。高い教育水準、少ない人口(280万)、エコツーリズムからの十分な収入(コーヒー、バナナに次いで第3位)が国土の27%を占める国立公園、野生生物保護区、多数の私立保護区などの維持を可能にしている。公用語はスペイン語。カトリック教会が散在するこの静かな国は1948年に軍隊を放棄し、1982年には大統領がノーベル平和賞を受賞、1992年には「環境と開発に関する世

### 直木一弥

界青年会議」が開かれる、など平和と自然保護に関してラテンアメリカのリーダー的存在なのである。

この小さな国に北米全域(カナダ、アメリカ)の650種をはるかに上回る850種の鳥類が記録されており、世界で最も鳥種の多いコロンビア(1700種、面積1138338km<sup>2</sup>)と比べても単位面積あたりの鳥種は10倍に及んでいる。鳥類以外にも哺乳類201種、は虫類199種、両生類150種、樹木1500種、昆虫に関してはまだ分類が十分にされていないという並はずれた自然の豊さが観察される。

この熱帯のパラダイスでの4年間、鳥を窓口にとどこまで自然の神秘が観られるか楽しみである。

\*コスタリカの自然に興味のある方は以下まで、ご連絡下さい。

KAZUYA NAOKI (コスタリカ大学在学中)  
% U. C. R. Escuela de Biología San José Costa Rica C. A. Tel: 243283



成末編集委員の

## 若手研究者インタビュー(7)

## 早矢仕有子さん

日本の最北端である北海道に、わずか80～100羽程度が生息するというシマフクロウを、5～6年前から追跡している一人の女性研究者がいる。早矢仕有子さんである。1992年の鳥学会大会は、大阪市立大学で開催されたが、早矢仕さんも発表のため参加されていた。

学会では、共同研究の「ラジオトラッキング法によるシマフクロウ若鳥の出生地からの分散先の追跡」について報告し、父娘間での近親交配を確認したという。これは、生息環境である河畔林の伐採や開発などによって、若鳥の分散経路が分断された事が、原因の一つではないかと言う。シマフクロウは、北海道の大自然の大きな変化を警告しているのかもしれない。

早矢仕さんの実家は、大阪という。広い所へ行きたくて北海道大学応用動物学研究室の門を叩いた。4年生になって何をしようかとのんびり考えていた頃、阿部永先生から、北海道庁からの委託調査で3年間、シマフクロウを調査してみないかと声をかけられたという。3年生の時に一度シマフクロウを見た事があったので、気楽に話に乗ったという。この話を聞きながら、春といっても氷点下という厳寒の北海道で、なにも夜行性の数も少ない、見づらい鳥を調べなくてもよさそうなものなのにと凡人は思うのであるが、素直に決めてしまったところが驚きである。

そのころ、環境庁においてもシマフクロウの保護対策事業が進められており、早矢仕さ



んが調査に取りかかった時には、魚の生け簀での給餌や巣箱の設置、バンディングなどの体制が出来あがっていたという。また地元の研究者や篤志家らも、彼女を大いにバックアップしてくれたので、調査開始の1987～1988年には、生け簀に飛来するシマフクロウの捕食行動や、ペリットによる食性分析、営巣地やねぐらなどの行動圏が徐々に明らかになっていったという。翌年には、巣箱を設置し、ビデオカメラで繁殖や育雛行動を観察し、給餌についても定性的、定量的に調査を行なったのである。

これらの結果については、修士論文や「野生動物分布等実態調査報告書」(1990)に詳しくまとめられている。現在ドクター論文を作成しながら、自らの分散を考え中という。

シマフクロウは、アイヌの人々から「村の守り神」とよばれ、私達にとっても、早矢仕さんを通じてとても親しみのある鳥に感じられる。シマフクロウ達も、きっと早矢仕さんのことを、自分達を優しく見守ってくれる「女神様」と思っているにちがいない。

## 蛇の食性

## 蛇の食性に関する情報を求む!

日本の蛇の食性に関する情報を集めています。蛇が野外で鳥を食べているところを目撃した、写真やビデオで撮影したという方がおられましたら、どんなものでも結構です。ぜひ、お聞かせください。また、蛇の捕食者の例も捜しています。蛇を餌としている鳥の情報をお持ちでしたら、1例でも結構ですのでぜひお聞かせ下さい。(これまでに入手した文献情報に基づく、日本産蛇類の野外食性のリストがありますので、入用の方はお知らせ下さい。)

連絡先：〒606-01 京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部動物学教室

森 哲 Tel. 075-753-4075

## 私のフィールドアイデア(5) 掻き分け棒

内田 博

オオヨシキリを相手のアシ原での調査で威力があったのは、園芸用の径16ミリ、長さ1.5mの竹に似せて造られているパイプであった。巣探しをするときに、アシを掻き分け左右の視界を、腕だけで掻き分けるよりも1mづつ以上稼いでくれて、巣の発見を楽にした。そして観察のためのビデオカメラの設置の際には、もっと細い同様なパイプを4本用意して、

2本ずつ2~3mの紐で繋ぎ、風でアシがカメラのフォーカスの中に倒れてくるのを防ぐため、巣からカメラまでの距離の間をナワバリにした。パイプを持って行くのは負担にはなるが、設置するときの労力は格段に省け、しかも効果的である。ブラインドの支柱や観察巣の支えなど色々用途もあって、これ、アシ原での調査にはお勧め品である。(東松山市)

### 学術集会

#### 関連学術集会(1993)

- ◆ 3月6~7日 津戸基金シンポジウム「鳥の学習と文化」(東京:本号)
  - ◆ 4月1~4日 第40回日本生態学会大会(島根大:no.45)
  - ◆ 4月7日 鳥獣研究者の自由集会(第104回林学会大会、森林総研東北支所:本号)
  - ◆ 9月1~9日 第23回国際行動学会議(スペイン:本号)
  - ◆ 9月20~24日 第6回国際ライチョウシンポジウム(イタリア:本号)
- 関連分野の学会大会・シンポに関する情報をお知らせ下さい(2ヵ月前までに)

### 津戸基金シンポジウム「鳥の学習と文化」

津戸基金シンポジウム「鳥の学習と文化」を以下の要領で開きますので、ぜひご参加ください。

#### 開催趣旨

鳥は自分自身の経験から、あるいは他個体のやっていることからいろいろな行動を学習する。そうした行動の中には、物事の前後関係を理解していると思われる、いわゆる洞察力をはたらかせたようなものも見うけられる。本シンポジウムでは、そうした学習行動を主な対象にして、行動の機能を明らかにしたり、行動の起源や発達過程について議論する。

#### 期日および会場

期日と時間:1993年3月6日(土)午後1時から7日(日)正午まで。

会場:立教大学12号館2階G201教室

#### 予定される演題(仮題)および演者

- 1) 甲虫消化の促進にプルリングを利用するブッポウソウ 中村浩志(信州大・教育・生物)
- 2) ササゴイの投げ餌漁の起源と発達 樋口広芳(野鳥の会・研究センター)
- 3) 石床を利用して貝殻を割るアカショウビン 松村澄子(山口大・医技短大部・生物)
- 4) 鳥に棲むメジロの盗蜜行動とその文化圏 上田恵介(立教大・一般教育・生物)
- 5) 車を利用して木の実を割るハシボソガラス 仁平義明(東北大・教養・心理)

#### 参加申込

参加を希望される方は、はがきに住所、氏名、電話番号を記入のうえ、下記のところに2月20日までにお申し込みください。

〒150 東京都渋谷区東2-24-5 日本野鳥の会研究センター 樋口広芳

#### 本シンポジウムの企画者および問い合わせ先

樋口広芳(03-3486-4869)、中村浩志(信州大・教育・生物、0262-32-8106 内線 361)



## 第23回国際行動学会議

第23回国際行動学会議が、1993年9月1～9日にスペイン南部の地中海沿岸の町Torremolinosで開催されます。1991年に京都で開催された会議に参加された方も多いたと思いますが、行動学・神経生理学・行動生態学などの分野で鳥関係の発表が数多くあります。参加費は2/15までに申し込むと一般300ドル、学生160ドルです。詳細を知りたい方は、

〒171 東京都豊島区西池袋3丁目 立教大学・一般教育・生物  
上田恵介(03-3985-2596、FAX. 3986-8784)まで。

## 第6回国際ライチョウシンポジウム

1993年9月20日～24日に第6回国際ライチョウシンポジウムが開かれます。開催場所は、イタリアのウジネ(Udine)です。

問い合わせ：〒080 帯広市稲田町帯広畜産大学 藤巻裕蔵(0155-48-5111)。

## お知らせ

### 学会からのお知らせ

#### 〈基金運営委員会からのお知らせ〉

日本鳥学会は会員などからのご寄付により現在総額16,770,868円の基金を有しております。それらの内訳と使用目的の詳細については学会誌の37巻4号217～218ページをご参照下さい。ところで、今回清水和雄氏から新たにご寄付いただいた100万円の運用について基金運営委員会では、その利子を会員の研究補助金(毎年、1件、お一人3万円)として使わせていただくことを立案し、それが評議員会で認められましたので、お知らせします。なお、申請の仕方については学会誌41巻1号をご参照下さい。

また、来年は国際鳥学会議(ウィーン)の年です。これに伊藤基金(お一人25万円、最大4件まで)を使って参加を希望される方は学会誌37巻4号254～256ページをご参照の上、申請の用意をはじめして下さい。なお、バックナンバーをお持ちでない方は、直接幹事までお問い合わせ下さい。

さらに、日本鳥学会には「奨学賞」があり、「学位論文、もしくはそれに準ずる研究を除く、日本鳥学会誌に掲載された単数または複数の優れた論文を書いた会員を1回に限り励ます」目的で5万円の賞金が黒田基金より与えられています。鳥学会誌にふるってご投稿下さい(基金運営委員会幹事、山岸哲、問い合わせ先：〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部生物学教室動物社会学研究室、Tel. 06-605-2584)

#### 〈評議員選挙の結果〉

日本鳥学会の評議員選挙(定数15)の開票が12月24日、国立科学博物館会議室において、山根茂夫氏の立会いのもとに行なわれました。その結果、次の15氏が1993・1994年度の評議員として選出されました。投票総数は208票。うち有効票は206票でした。

樋口広芳(116)、長谷川博(103)、上田恵介(102)、黒田長久(99)、山岸哲(98)、唐沢孝一(89)、中村登流(89)、藤巻裕蔵(87)、森岡弘之(85)、中村浩志(79)、福田道雄(77)、中村司(62)、阿部学(59)、藤岡正博(45)、竹下信雄(43)。次点：川内博。(庶務幹事)

#### 〈会則の改正〉

1992年度総会で下記のように会則の一部が改定されました。1993年度より実施します。

1. 会頭、副会頭の名称を、それぞれ会長、副会長と改める。
2. 学生会員(会費3,000円)を新設する。(庶務幹事)

## お知らせ

### 〈会則改正にもなう納入金処理方法についてのお願い〉

学生（高校・大学・大学院生および主として学業に従事している方）は会費払込書通信欄に、身分を証明する指導教官の署名捺印を記して申告して下さい。すでに今年度会費を納入された方の会費については、返金のための事務作業と経費節減のため、下記のように処理させていただきます。超過の2,000円は1994年度会費の先払い分とし、申し出があった場合のみ返金します。なお、教官の署名捺印がなくなった場合には、普通会员として処理いたします。

（会計幹事）

### 〈国際鳥学セミナーの準備状況〉

国際鳥学セミナーについては、前号及び昨年の大会でお知らせしたように、スウェーデン・ウプサラ大学のA. P. Møller 博士を招待することになりました。博士の滞在及び講演のプログラムの大筋がまとまりましたのでお知らせします。前回のMock博士の時のように、一般向けの講演会と院生・学生向けのワークショップを予定しています。期日はMøller 博士の希望で9月中旬以降。多少の変更があるかもしれませんが、開催場所と講演テーマは、

- (1)東京（立教大学） 「性淘汰と鳥の美しい羽の進化」
- (2)秩父（東大演習林） 「鳥における精子競争と性淘汰」
- (3)大阪（大阪市大） 「鳥における形態変異、発生の安定性、及び性淘汰」
- (4)場所未定 「鳥の生活史における寄生虫の役割」を予定しています。

### 〈編集委員の異動〉

1991年からニュースの編集を担当して頂いていた中村一恵さんが、公務多忙のため、幹事を辞任されました。今後はニュース幹事は1名で運営することになり、あらたに日本野鳥の会研究センターの藤田剛さんに編集委員に加わって頂きました。（ニュース幹事）

### 〈ニュース原稿の送り先が変わりました〉

原稿送付先：〒105 港区芝3-1-14 日生赤羽橋ビル6F WWF Japan  
花輪伸一（03-3769-1713、Fax. 03-3769-1717）

原稿はワープロ使用の場合も1行20字でお送り下さい。

次号（No.47）原稿〆切は3月20日、発行は5月1日です。

## 編集後記

- 新人です。ニュースをさらに若くできるでしょうか？（G o）
- 植物は若手にまかせて、今年は鳥にもどるぞ（大）
- 11月の大阪大会では15年ぶりにA氏と再会し、胸を熱くしました（成）
- 6月9～16日に釧路市でラムサール条約締結国会議が開かれます。ウェットランド（湿地）の鳥を調べている方は注目して下さい（花）
- 今年の正月はインドのケオラディオ・ガーナ国立公園で鳥を見ていました（K）

## 鳥学ニュース No.46

1993年2月1日 発行（会員配布）

発行 日本鳥学会

〒169 新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内 Tel. 03-3364-2311

発行人 森岡弘之

印刷所 添田印刷株式会社

編集 花輪伸一・大堀 聡・成末雅恵・藤田 剛・上田恵介（幹事）